

令和4年度

中学生の「税についての作文」入賞作品

(国税庁・全国納税貯蓄組合連合会 共催)

全国納税貯蓄組合連合会会長賞

支える人になる

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 一年 岩佐 葵

私の祖母は約二十年、一人暮らしをしていた。近くに住む同年代の方が次々と転居されたこともあり、「誰とも話さない日が多く寂しい」と言うようになっていた。そんな祖母に容赦なく病が忍び寄っていた。認知症である。診断を受けた時にはすでに脳が萎縮し始めていたが、祖母は必死に生きた。しかし、急に怒り出す、ほんの少し前のことを覚えていない、など祖母は次第に別人のようになっていった。祖母の対応に追われる父母もまた、疲弊していった。しかし、どうすればよいのか答えが見つからない。真っ暗なトンネルをずっと彷徨っているようだった。

そこに光が見えたのは、介護保険制度のおかげだった。それまでは介護保険という言葉を知っていたが理解はしていなかった。父の給与から介護保険料としてそれなりの金額が引かれており、勝手に徴収されているという認識だった。祖母の病気をきっかけに当事者となったことで、改めて介護保険制度について調べて

みた。介護保険制度は市区町村が保険者となって運営しており、四十歳以上の住民が加入者となって保険料を納め、介護が必要と認定されたときに費用の一部を支払うことでサービスを受けることが可能となる仕組みである。一人暮らしは難しいと思われた祖母だったが、ケアマネージャーさんのアドバイスをもとに訪問介護や通所介護を組み合わせ、多くの人に支えてもらいながら生活することができるようになった。祖母が受けたサービスは多岐にわたったが、自己負担額は非常に少なく実際にかかった費用の1割であった。では、残り九割は誰が負担しているのか。それは、半分を加入者からの介護保険料、残りの半分を国や都道府県、市区町村などが負担している。つまり税金だ。税金制度によって、祖母は最期まで穏やかな生活を送ることができたのだ。

超高齢化に突き進む日本では社会保障費が増大し続けている。財源となるのが保険料と消費税であるが、今後も現在と同様の社会保障制度を維持していくためには消費税や自己負担額の引き上げも考えられる。もちろん、無駄な支出を減らし貴重な財源を有効活用することが求められるが、納税者としての私たちも税金に対する考えを改めなければいけないのではないだろうか。義務としてしぶしぶ納税するのではなく、納税によって私も社会を支えているのだと誇りに思うべきなのだ。そして、その税金は現在の生活を維持し、より豊かな未来を創り出す根幹となる。私も数年後には社会人となり本格的に納税する立場となる。祖母の介護をきっかけに税に対して理解を深め、祖母や私たち家族が支えられてきたように、しっかりと納税することで誰もが安心して穏やかに暮らせる社会を支える人になりたいと思う。